くらし

てかがみ

のど自慢

97歳の父が「のど自慢」に出場した。予選会出場が決まってからは、一緒にカラオケに行ったりデイサービスで歌ったりと、練習に余念がなかった。

予選会は本選の前日にあり、千人近くの応募者の中から250人に絞られ、昼前から本番と同じ生演奏で行われた。予選会とはいえ、1階の客席は大半埋まっていた。観客が多かったのと、ぶっつけ本番だったのとで父は実力の半分も出せず、がっかりしていた。

しかし、年がものをいってか本選出場を勝ち得た。ただ、その後のハードスケジュールに高齢の父が耐えられるか懸念したが、その心配は、本番前の出場者全員の決起集会で元気に声を上げている父を見たとき拭い去られた。

本番で、父は出だしが少し遅れたが、リハーサルのおかげで力強く、そして心を込めて歌えた。アナウンサーとのやりとりもきちんとこなし、皆に彼が97歳だということを忘れさせた。日ごろのようにうまくは歌えなかったが、大勢の観客の前での堂々とした態度に感銘を受けた。

父の力強い歌声に感動。義母の心こまやかなサポートに感謝。とても楽しい2日間だった。

(松山市　宮本　和子　67歳・主婦)

灯台からの響き　―240―

宮本　輝・作
瀬尾　夏美・画

小坂真砂雄は、出雲大社の右側にある蕎麦屋を指差し、

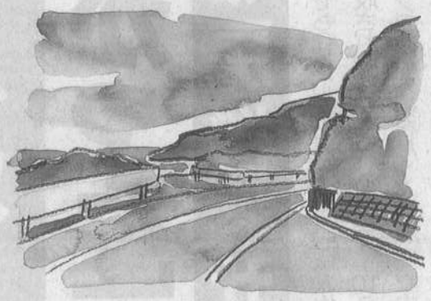
「母は、あそこで働いてたんです」

と言って、そのまま車を大社の左側に沿った道へと走らせた。

「懐かしいですよ。大学生活最後の夏に、日御碕灯台に行った日、わたしは灯台から海沿いの道をここまで歩いたんです。それから、蘭子さんが卒業した学校まで行って、卒業生名簿を見せてもらいました。あのころは個人情報なんていまほど神経質じゃなかったですし、わたしも卒業生だったから、すぐに見せてくれました。だから、蘭子さんが牧野っていう姓になってることも、板橋区の住所もわかったんです」

畑と民家が交じり合うような場所を通り、うねった道を進むうちに日本海が見えてきた。バス通りと合流したようだった。

「断崖絶壁だらけの海岸線ですね」



康平は勾配のきつくなった道路から海を眺めながら言った。

「ええ、急に嵐がやって来ても、昔は船が避難するところがなかったんです。岩礁にたたきつけられて船はばらばらに壊れてしまうか

福祉避難所整備 最優先に

国・自治体 要配慮者へ事前周知を

寄稿　鈴木　秀洋
日大危機管理学部准教授

東日本大震災で宮城県石巻市の中学校の体育館に設置された福祉避難所＝2011年3月

台風19号による死者の内訳は、60歳以上が7割と報道されている。阪神淡路大震災以降、高齢者や障害者、乳幼児ら特に配慮を要する人々には、一般避難所とは別に特別に指定される避難所が必要であり、「福祉避難所」の設置が求められてきた。

熊本地震前には「福祉避難所の確保・運営ガイドライン」が改定されたが、その後の震災においても福祉避難所が機能しなかったとの報道ばかりである。それはなぜなのか。

まず、福祉避難所は多くの自治体で第2次的避難所と位置付けられている。そのため、一般の避難所整備よりも個別具体的な設置運営方法の確定などは後回しにされている。(内閣府によると、2018年10月1日時点で、指定避難所は7万5895カ所、うち福祉避難所は8064カ所)

二つ目は、具体的にいつ開設され、自らが要配慮者として福祉避難所を利用できるのか、仮に利用できるとしてどこの福祉避難所を利用できるのかが事前に周知されていないことである。多くの自治体では、福祉避難所の利用手順は①一般避難所への避難②そこでの申し出と判定③福祉避難所への自主移動促進―という流れになっている。

これらの課題に対しては、災害時の利用手順を強調するのではなく、平時から利用基準を設定・公表し、周知および個別通知を徹底すべきなのである。なぜなら、介護認定や障害者手帳交付状況などから、命(関連死)の危険に直結する人々が相当数地域にいることは、自治体にとっては平時から明らかだからである。

まずは、福祉避難所整備に関する現行の国のガイドラインの改定を望む。しかし、改定を待たずとも、自治体ごとで、地震や台風など震災の形態に合わせ、かつ、地域の状況に応じた福祉避難所の設置運営や避難支援(避難行動要支援者名簿の整備や個別計画の推進)について、連動的な具体的な計画を立て直すことが急務である。

一般避難所に行かなかった人々にヒアリングすると、福祉避難所があることを知らなかったとの声を聞く。今回の台風時にも「避難してください」との無線やニュースが流れるが、ではどこに行けばよいのか、その施設には自らが命を紡ぐ人的・物的設備があるのか、それが分からなければ避難できる訳がないとの声が聞かれる。

避難行動を起こすことが、まさに命がけの人々への具体的対策が必要となる。要配慮者のための福祉避難所の整備は、最優先の喫緊課題である。

すずき・ひでひろ　1967年埼玉県出身。東京都文京区危機管理課長などを歴任し、2016年から現職。地方自治法を担当。災害弱者の法制度設計や運用に詳しく、危機管理行政法の分野を切り開いている。著書に「自治体職員のための行政救済実務ハンドブック」など。

情報バスケット

◆発達障害児の家族支援に関する講演会　11月3日午後1時～4時半、東温市志津川の愛媛大医学部看護学科校舎で。鳴門教育大の小倉正義准教授による基調講演「地域における家族支援の在り方を探る」やシンポジウムがある。発達障害児を育てた経験があり、育児の悩み相談などに応じる「ペアレント・メンター」養成講座の一環だが、誰でも参加できる。参加費、駐車場無料。氏名、連絡先を明記し、10月31日までに申し込む。申し込み、問い合わせは主催する「ペアレント・メンターえひめ」＝メールpmehime@gmail.comまたはファクス089(960)5423。

料理メモ

◆マッシュルームのアヒージョ　2人分でホワイトマッシュルーム、ブラウンマッシュルーム各50グラム、アンチョビー1枚、パプリカ70グラム、ブロッコリー70グラム、ミニトマト6個、ニンニク1かけを用意します。

マッシュルームは汚れを除いて軸を落とします。アンチョビーは粗みじん切りにし、パプリカは2センチ角、ブロッコリーは小房に切り分け、ミニトマトはヘタを取ります。

フライパンにオリーブ油大さじ3とニンニクのみじん切りを入れ弱火にかけ、香りが出たらアンチョビーを加えます。マッシュルーム、パプリカ、ブロッコリーを入れて中火で炒め、ミニトマトと白ワイン大さじ1も加え、ふたをし